

農林水産省補助事業

# 動物用ワクチン利用の手引き (豚用ワクチン編)

令和2年3月

動物用ワクチン等保管協議会



## 目 次

はじめに

第1	豚の感染症とその予防	2
第2	生ワクチン及び不活化ワクチンの特徴等	4
第3	豚用ワクチン	5
1	ワクチン一覧の解説（利用にあたって）	5
2	ワクチン一覧	8
2-1	ウイルスワクチン	8
2-2	細菌等ワクチン	20
2-3	ウイルス・細菌の混合ワクチン	35
表	ワクチン一覧におけるワクチンと含有する ウイルス・細菌の名称一覧	38



## はじめに

豚用ワクチンに関する「動物用ワクチン利用の手引き」については、豚用ウイルスワクチン（細菌との混合を含む。）21 製剤、29 品目について、平成 31 年（2019 年）3 月に「動物用ワクチン利用の手引き（豚用ウイルスワクチン編）」（「第 1 豚の感染症とその予防」、「第 2 生ワクチン及び不活化ワクチンの特徴等」及び「第 3 豚用ウイルスワクチン（「1 ワクチン一覧の解説（利用にあたって）」及び「2 ワクチン一覧」で構成）として発刊しました。

今般、新たに豚用細菌等ワクチン（トキソイド等を含む。）27 製剤、35 品目について効能・効果、用法・用量、接種プログラム、使用上の注意（抜粋）等を一覧表形式に取りまとめ、「ワクチン一覧」に追加収録し、「動物用ワクチン利用の手引き（豚用ワクチン編）」と改題して作成しました。

手引きの構成については、細菌等ワクチンの追加収録に伴い「動物用ワクチン利用の手引き（豚用ウイルスワクチン編）」の第 3 を「豚用ワクチン」とし、「2 ワクチン一覧」に「細菌等ワクチン」の項を追加して整理しました。さらに、内容については、追加収録に伴い関連する部分の記載の整備を併せて行いました。

本手引きは、「緊急時ワクチン等流通マニュアル」（平成 29 年 6 月発刊）の適切な運用に寄与することを目的としていること、飼養衛生管理の一つのツールとしての位置づけであること等については、「動物用ワクチン利用の手引き（豚用ウイルスワクチン編）」と同様ですので、引続き、地域、飼育場（農家）ごとの感染症対策における衛生管理プログラム作成の一助としてご活用願います。

## 第1 豚の感染症とその予防

養豚経営を安定化するためには、疾病、特に感染症の発生による損耗を防止することが重要です。

感染症は、ウイルス、細菌又は原虫等の病原微生物が感染し、体内で増殖することにより発病します。感染症の発生状況や症状の程度あるいは被害状況は、病原微生物の病原性の強弱や感染量の多寡等病原体の要因と豚の日齢や移行抗体の有無あるいは栄養状態の良否等の宿主側の要件、さらには輸送等によるストレスや密飼い等の飼養管理の失宜、飼育衛生管理の不良等の飼育環境要因によって大きく左右されます。

こうした感染症の発生を予防するには、①感染源の排除、②感染経路の遮断及び③宿主の感染防御能の強化が必要で、そのためには、家畜伝染病予防法に規定された「飼養衛生管理基準」を遵守するとともに、以下の事項に十分留意して計画的に飼養衛生管理を徹底することが重要です。

### 1 導入豚の選定

子豚や繁殖候補豚を導入する際には、導入元飼育場及びその周辺における感染症発生の有無等について調査するとともに、新たな導入個体や群については、一定期間、既存の豚との直接接触を避け、健康状態の良否を十分に観察しましょう。慢性型の呼吸器疾患あるいは慢性型のウイルス疾患といった確認が容易でない感染症の有無については、導入前に必要な予防接種が計画的に実施されていることを確認し、導入前あるいは隔離期間中に専門の検査機関で検査（抗体検査、PCR 検査等）を行うとともに隔離期間中には慎重な観察に心がけましょう。

特に、繁殖候補豚や輸入豚を導入する場合は、血清学的検査や微生物学的検査を実施して事前に特定の感染症に罹患していないことを確認しておくことが大切です。

### 2 飼育環境の改善

豚舎及びその周辺の清掃、糞尿の適切な処理、排水溝の整備及び悪臭防止対策を励行しましょう。また、施設に見合った消毒法を確立し、それに基づいて消毒を励行しましょう。これらの実施には、同一日齢豚群を他の豚群と接触することなしに飼育するオールイン・オールアウト飼育が望ましく、獣医師など専門家と相談して、できるだけ、この飼育方法を取り入れるようにしましょう。

栄養及び飼育管理に注意し、舎内の温度・湿度を適正に管理して良好な健康状態の維持を図るとともに適正な換気に留意して呼吸器病等の発生、蔓延を未然に防止するよう努めましょう。特に、密飼いを避けるための計画的な飼育を徹底しましょう。

新生子豚の場合は、分娩後、できるだけ早く乾燥させ、かつ、保温に努めるとともに初乳を確実に飲ませましょう。

その他、地域の農場、獣医師、家畜保健衛生所、食肉処理場等との連携によると畜検査成績、感染症発生情報等の衛生関係情報の共有、農場 HACCP や地域防疫の推進等によって

疾病清浄化を図ることができれば、生産性の向上に大きく貢献することは明白です。

### 3 病原体の侵入防止

農場内に「病原体の侵入及び蔓延の防止を重点的に行う区域」として衛生管理区域を設定し、衛生管理区域内への外来者の立入及び車両の乗入れを制限し、立入等をさせる場合には、入退の記録、人については手指の消毒、専用の衣服、長靴などへの交換を、また、車両については消毒を徹底しましょう。さらに、導入豚の豚体消毒、作業員の分担領域の区分又は作業手順の制定・遵守、豚舎へ入舎際の手指の消毒と専用の長靴などへの交換、ならびに豚舎内外の定期的な消毒を励行し、豚舎への病原体の侵入防止はもとより衛生管理区域全体のリスク低減を図るとともに、野生鳥獣の侵入防止や衛生害虫の発生防止に努めましょう。

### 4 病気の早期発見、隔離及び安楽殺の実施

豚の健康状態を毎日観察し、異常を認めたものは直ちに隔離飼育し、獣医師に診断・治療を依頼しましょう。治癒の見込みのない豚は、できるだけ早く安楽殺の措置を講じて無用な苦痛を除くよう努めましょう。

なお、家畜伝染病（法定伝染病）、届出伝染病が疑われる場合は、直ちに家畜保健衛生所に届出を行い、家畜防疫員の指示に従って防疫措置を講ずるようにしましょう。

### 5 予防接種の励行

ワクチンが市販されている感染症については、その地域に適した衛生管理プログラムに従い、ワクチン接種を計画的に実施するようにしましょう。

豚群に有効な免疫を与えておくことは、たとえ病原体が飼育場に侵入した場合でも、感染症の発生を阻止する上で極めて有効な手段となります。

ただし、ワクチンは衛生的に飼育管理されている健康豚に正しく使用しなければ、十分な効果を期待することはできません。そのため、使用前には、ワクチンの添付文書（使用説明書）の使用上の注意を必ず読み、適切な使用を心がけましょう。

### 6 抗菌剤の適正使用

ウイルス性の呼吸器感染症や消化器感染症に対しては、一般に抗菌剤の使用は必要ありません。

ワクチンが開発されていない細菌性疾病の発生時には、抗菌剤を用いて治療を行うこととなります。抗菌剤は要指示医薬品であるので、獣医師による診断、指示に基づき適切に投与しましょう。

不適切な使用は、耐性菌の出現頻度を高めることとなるばかりか抗菌剤自体の使用価値を下げることにもなります。特に、二次選択薬とされているフルオロキノロン系、第三世代以降のセファロスポリン系、コリスチン等の抗菌剤の使用については、用法・用量及び使用上の注意の厳守を含め慎重使用を徹底しましょう。

## 第2 生ワクチン及び不活化ワクチンの特徴等

	生ワクチン	不活化ワクチン
本質	ウイルス、細菌を人為的な操作により弱毒化した生きたままの株を用いたワクチン	ウイルス、細菌の感染性を物理・化学的に処理して不活化したワクチン※
安全性（ワクチン中抗原の感染性の観点から）	動物の感受性・接種時の健康状態によりワクチン株の増幅による副作用が発現するリスクが考えられる。	一般に不活化されているため安全性は高い（感染性はない）。
有効性（免疫の特質、成立及び持続の観点から）	液性免疫及び細胞性免疫。 一般に免疫持続が長く、自然感染ルートからの投与が認められたワクチンでは、早期に局所免疫の発現が期待できる。	主に液性免疫。 免疫の成立は、一般に遅く、免疫持続が短い（アジュバントを加えることにより免疫持続の長期化は可能）。
アジュバント	通常不要	必要
その他	製造用材料（動物、培養細胞、血清等）に潜在するウイルスがワクチンに迷入し、それにより発病するリスクは生ワクチンの本質の点から否定できない。	免疫強化のために用いるアジュバントによって接種反応がでる可能性がある。 精製化により副作用の少ないワクチンができる。

※：ウイルス構造たん白質のうち感染防御に関与する（糖）たん白質を精製したサブユニット、その遺伝子をクローニングし発現させたペプチドをワクチン成分とすることもある。

アジュバント：アジュバントは、ワクチンの免疫原性を増強させる目的で使用される物質の総称で、ワクチンの抗体産生作用を高めるためにワクチンに添加させた物質を意味する。一般には、水酸化アルミニウム、鉱物油、植物油、サポニン、トコフェロール酢酸エステル（ビタミンE）高分子ポリマー及び ISCOM (immunostimulatory complex) 等がアジュバントとして用いられている。近年、遺伝子工学によるサブユニットワクチン、合成抗原等を用い新たなワクチン開発も進められ、アジュバントの応用がこれら抗原に対する免疫応答（血中抗体産生）を強化（増強）する意味で重要になっているとともに、細胞性免疫を誘導する機能をもつアジュバントの開発もなされている。



## 第3 豚用ワクチン

### 1 ワクチン一覧の解説（利用にあたって）

#### （1）目的・全体概要

本一覧は、獣医師等の家畜衛生関係者が畜産農家のワクチン使用に際して利用するために、個々のワクチンごとに製造販売承認申請書（以下「承認申請書」という。）、添付文書、その他の情報をもとに一覧表として整備したものである。掲載しているワクチンは、令和元年7月末時点で製造販売されている豚用のワクチン48製剤、64品目について、ウイルスワクチン、細菌等ワクチン及びウイルス・細菌の混合ワクチンに区分して、それぞれ有効成分数ごとに取りまとめた。

なお、ワクチン64品目と含有するウイルス・細菌の名称との関係を表として取りまとめた。

#### （2）法的規制

掲載しているすべてのワクチンの医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律（以下「法」という。）による取扱い等の規制は、それぞれ法第83条第1項の規定により読み替えた法第44条第2項、第49条第1項及び第36条の8第1項に基づく「劇薬」、「要指示医薬品」及び「指定医薬品」である。

#### （3）一覧表解説

##### ア 製品名

承認申請書及び添付文書（以下「承認申請書等」という。）における品名を記載した。

##### イ 製造販売業者名

略称で記載したが、正式名称は下表のとおりである。

略称	正式名称
MSDAH	MSD アニマルヘルス株式会社
科飼研	株式会社科学飼料研究所
共立	共立製薬株式会社
KMB	KMバイオロジクス株式会社
セバ	セバ・ジャパン株式会社
ゾエティス	ゾエティス・ジャパン株式会社
日生研	日生研株式会社
京都微研	株式会社 微生物化学研究所

ベーリンガー	ベーリンガーインゲルハイムアニマルヘルスジャパン株式会社
松研	松研薬品工業株式会社

#### ウ 有効成分名

承認申請書等における有効成分としてのウイルス、細菌名（血清型、抗原型等を含む。）とし、細菌が産生する毒素等が本質の場合には、名称及びその種類を記載した。遺伝子組換え技術を応用した場合については、「組換え型」と記載を付した。

株名については、原則、省略したが、他のワクチンの接種プログラムで特定の株名のワクチン投与が規定されている場合には記載した（日生研日本脳炎生ワクチン、“京都微研”、日本脳炎ワクチン、日本脳炎・豚パルボ混合生ワクチン「KMB」、 “京都微研”、日本脳炎・豚パルボ混合生ワクチン及び “京都微研”、豚死産3種混合生ワクチン）。

また、生・不活化の別及びアジュバントを含有する製剤にあつては、それぞれ（ ）内にその旨を記載した。「生」については、弱毒である。

#### エ 用法・用量及び効能・効果

品目ごとに承認申請書等での記載を原則そのまま記載した。ただし、品目が複数である製剤であつては、品目ごとに表現は異なるが、その内容が同等と判断した場合には、記載の統一を図った。また、用法・用量においては、用法が注射の製剤にあつては「注射」、それ以外の製品にあつては、「投与」と整理し、記載した（接種プログラム及び使用上の注意（抜粋）においても同じ）。さらに、豚以外の動物も対象となっている動物用日脳TCワクチン「KMB」、日生研日本脳炎TC不活化ワクチン、“京都微研”、日本脳炎ワクチン・K及び破傷風トキソイド「日生研」に関しては、豚のみに限定した記載とした。

#### オ 接種プログラム

製造販売業者による添付文書、パンフレット（「豚用ワクチンと診断液のご案内」（2001年 社団法人動物用生物学的製剤協会編）を含む。）に掲載されている接種プログラムに関する内容を再検討し、これらの記載内容に基づき用法・用量とともに図（以下参照）及び文章の形式として整理した。図中においては、投与対象日齢等に限定がある場合には、その旨を記載した。また、文章においては、添付文書等をもとに疾病の発生時期、免疫持続等の有効性に関する情報について記載した。

上段：投与量	2mL	2mL	2mL
	— I — I — I —		
下段：投与時期	3～5週間隔		半年～1年毎

#### カ 使用上の注意（抜粋）

製品の添付文書における使用上の注意のうち、家畜衛生上（微生物の伝播の防止、免疫賦与、禁忌等）及び公衆衛生上（使用制限期間（と畜場への出荷の制限期間）（注））の観点からの重要事項、使用制限、副反応に関する事項、使用者への注意等を抜粋し、記載した。なお、全体に共通する事項については、以下に記載した。

- ・注射器具（注射針）は、原則として1頭ごとに取り替えること
- ・移行抗体価の高い個体では、ワクチン効果が抑制されることがあるので、幼若な豚への投与は移行抗体が消失する時期を考慮すること（生ワクチン）
- ・2回注射による免疫を行う場合には、2回目の注射は、1回目と異なる部位に行うこと

（注）使用制限期間に関する記載（「本剤はと畜場出荷前〇〇日（週）間は使用しないこと。」）のない製剤にあつては、と畜場法に基づき厚生労働省は、注射後20日以内の出荷は控えるよう指導している。

#### キ 参考情報

使用に際して、有効性の担保にとって有用な製品の特徴等を記載した。

#### ク その他

接種プログラム等についてさらに詳細が必要な場合には、各製造販売業者にお問い合わせ願います。

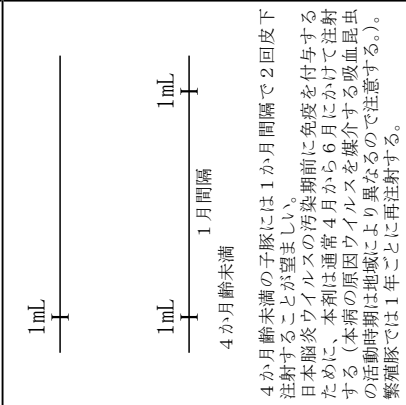
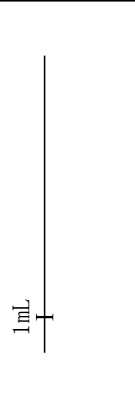
「使用上の注意」を含む添付文書については、各製品の添付文書又は各製造販売業者のHP並びに農林水産省動物医薬品検査所HP（動物用医薬品（体外診断用医薬品を含む）添付文書等ダウンロードページ

<http://www.maff.go.jp/nval/tenpubunso/iyakuhin.html>）をご覧ください。

## 2 ワクチン一覧

### 2-1 ウイルスワクチン

(1) 1成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
1	日生研日本脳炎生ワクチン	日生研	日本脳炎ウイルス株 (生)	乾燥ワクチンに添付の溶解用液に加えて溶解し、その1 mLを豚の皮下に注射する。	豚の日本脳炎の予防及び日本脳炎ウイルスによる死産の予防	 <p>4か月齢未満の子豚には1か月間隔で2回皮下注射することが望ましい。日本脳炎ウイルスの汚染期前に免疫を付与するため、本剤は通常4月から6月にかけて注射する(本病の原因ウイルスを媒介する吸血昆虫の活動時期は地域により異なるので注意する。)。繁殖豚では1年ごとに再注射する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤に含有されるウイルスは人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。</li> </ul>	
	“京都微研”日本脳炎ワクチン	京都微研	日本脳炎ウイルス株 (生)	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、1 mLを頸側皮下に注射する。	豚の日本脳炎感染の予防、繁殖用母豚にあっては日本脳炎感染に起因する死産予防			

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
2	動物用日脳T C ワクチン「KM B」	KMB	日本脳炎ウイルス (不活化)	弱毒日本脳炎ウイ ルスm株で免疫し た豚に1か月後2 mLを皮下に注射す る。 前年度にワクチン 歴を有する豚には 2mLを皮下に注射 する。	日本脳炎ウイルス による豚の死産の 予防	1mL(※) 1月間隔 2mL (前年度にワクチン歴を有する豚) 2mL	※：日本脳炎ウイルスm株を有効成分とする生 ワクチン	
	日生研日本脳炎 T C不活化ワク チン	日生研		日本脳炎生ワクチ ンat株で免疫し た豚に1か月後2 mLを皮下注射す る。 前年度にワクチン 歴を有する豚には 2mLを皮下注射す る。	※：日本脳炎生ウイ ルスat株を有効成分とす る生ワクチン	1mL(※) 1月間隔 2mL (前年度にワクチン歴を有する豚) 2mL	日本脳炎ウイルスの汚染期前に免疫を付与する ために、本剤は通常4月から6月にかけて注射 する(本病の原因ウイルスを媒介する吸血昆虫 の活動時期は地域により異なるので注意する。)	
3	“京都微研” 日本脳炎ワクチ ン・K	京都微研	日本脳炎ウイルス (不活化)(アジエ バン)	(1) 日本脳炎生 ワクチンとの併用 注射法 第1回 “京都微研” 日本 脳炎ワクチン 1ドース(mL) 皮下注射 第2回 “京都微研” 日本 脳炎ワクチン・K 2mL 皮下注射 第1回と第2回の 注射間隔は約1か 月とする。 (2) 前年度に“京 都微研” 日本脳炎 ワクチンを注射し た豚では2mLを皮 下注射する。	豚の日本脳炎ウイ ルス感染による死 産の予防	1mL(※) 約1月間隔 2mL (前年度に※を注射した豚の場合) 2mL	※：日本脳炎ウイ ルスm株を有効成分とす る生ワクチン	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
4	スパキシム オーエスキー	共立	オーエスキーウイルス (生)	乾燥ワクチンを添付の溶解用液で溶解し、その1mLを次に、より豚の筋肉内に注射する。 ①生後8～10週に1回、更に必要がある場合は3週以上の間隔を置いて1回追加注射する。 なお、感染の危険性のある場合には、生後3～5日に初回注射したのち、8～10週齢に1回追加注射する。 ②妊娠豚においては分娩前3～6週に1回、その後の追加免疫は各分娩前3～6週又は年2回注射する。	豚のオーエスキー病の発症予防	<p>※3週間隔以上 ※ 8～10週齢</p> <p>※必要な場合 (感染の危険性のある場合) 1mL 3～5日齢 8～10週齢</p> <p>1mL 3～6週前 分娩 3～6週前 分娩 1mL 年2回</p> <p>妊娠豚</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤は国が定めたオーエスキー病防疫対策要領に基づき使用すること。</li> <li>豚以外の動物には使用しないこと。兎は、このワクチンウイルスに感染すると死亡することがある。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
5	スパキシ オーエス キーフ オルテME	共立	オーエス キール ス(生) (ア ジュ バン ト)	乾燥製 品を添 付の溶 解用液 で溶解 し、そ の1mL を次に より豚 の耳根 部又は 臀部筋 肉内に 注射す る。 ①生後 8～10 週に1 回、更 に必要 がある 場合は 3週以 上の間 隔をお いて1 回追加 注射す る。 ②繁殖 豚につ いては 、年1 回以上 注射す る。	豚のオ ーエス キール 病の発 症予防	<p>1mL  -----  8～10週齢 ※3週間隔以上</p> <p>※必要のある場合</p> <p>1mL  -----  年1回以上</p> <p>繁殖豚</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤は国が定めたオーエスキー病防疫対策要領に基づき使用すること。</li> <li>豚以外の動物には使用しないこと。兎は、このワクチンウイルスに感染すると死亡することがある。</li> </ul>	
	ポーリス Begonia DF・10 ポーリス Begonia DF・50	松研 (販売はMSD AH)		乾燥ワ クチン を添付 の溶解 用液で 溶解し 、その 2mLを 次の要 領で豚 の筋肉 内に注 射する。 ①8～ 10週齢 に1回 、さら に必要 がある 場合は 3週間 以上 の間隔 をおい て1回 追加注 射する。 ②妊娠 豚にお いては 、分娩 前3～ 6週に 1回、 その後 の追加 免疫は 各分娩 前3～ 6週ま たは年 2回注 射する。		<p>2mL  -----  8～10週齢 ※3週間隔以上</p> <p>※必要がある場合</p> <p>2mL  -----  3～6週前 分娩 3～6週前 分娩</p> <p>2mL  -----  年2回</p> <p>妊娠豚</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤は国が定めたオーエスキー病防疫対策要領に基づき使用すること。</li> <li>本剤の注射後、SPF豚(SPFブライマリー豚等)では、一過性の軽度な発熱が認められることがある。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
6	フォステラ PCV	ゾエテイイス	豚サーコウイルス (1型・2型キメラ) (不活化) (アジュ バント)	3週齢以上の豚に 2mLを1回、頸 部筋肉内に注射す る。	豚サーコウイルス 2型感染に起因す る死亡豚及び発育 不良豚の発生率の低 減、増体量の低下 の改善、臨床症 状の改善及びウイ ルス血症の低減	2mL ├─── 3週齢以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妊娠中の繁殖用雌豚には注射しないこと。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
7	インゲルバックス サーコフレックス	ベーリンガー	豚サーコウイルス (2型・組換え型) (不活化) (アジュ バント)	3週齢～5週齢の 子豚に1頭当たり 1mLを1回、頸部 筋肉内に注射す る。	豚サーコウイルス 2型感染に起因す る死亡率の改善、 発育不良豚の発生 率の低下の改善、臨 床症状の改善及び ウイルス血症発生 率の低減	1mL ├─── 3～5週齢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アナフィラキシー反応が起こった場合は、エピネフリン投与が推奨される。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
8	ポーシリス PCV	MSDAH	豚サーコウイルス (2型・組換え型) (不活化) (アジュ バント)	3週齢から9週齢 の豚にワクチンの 2mLを1回、頸 側部筋肉内に注射 する。ただし、豚 サーコウイルス2 型の感染時期が早 期な場合、又は、 母豚からの移行抗 体の保有レベルに ばらつきが認めら れる場合には、3 日齢以上の豚にワ クチンの2mLを 3週間隔で2回注 射すること。	豚サーコウイルス 2型感染に起因す る死亡率の改善及 び増体量の低下の 改善	2mL ├─── 3～9週齢  (豚サーコウイルス2型の感染時期が早期な場 合、又は、母豚からの移行抗体の保有レベルに ばらつきが認められる場合)  2mL ├─── 3週間隔  3日齢以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本剤は、と畜場出荷前5週間は使用しないこと。</li> <li>・妊娠中の繁殖用雌豚には注射しないこと。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	



一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
9	サーコーバック	セバ	豚サーコーウイルス (2型) (不活化) (アジュバント)	<p>抗原液及びアジュバントの各バイアルをそれぞれよく振盪した後、抗原液全量をアールに注入し、泡立ちをなくし、程度にゆとり10回程度転倒混和し、下記の量を豚の耳根部後方の頸部筋肉内に注射する。</p> <p>3週齢以上の豚に0.5mLを1回注射する。ただし、繁殖雌豚に対しては以下の方法で免疫を行う。</p> <p>1. 初回免疫 1.1母豚候補豚1回2mLを交配前3～4週間隔で2回、さらには分娩前に1回の計3回注射する。ただし、2回目の注射は交配予定日の3～4週間前、3回目注射は分娩予定日の2～4週間前に行う。</p> <p>1.2産歴のある妊娠豚1回2mLを3～4週間隔で2回注射する。ただし、2回目の注射は分娩予定日の2～4週間前に行う。</p> <p>2. 次回以降の免疫 (初回妊娠時以降の免疫) 1回2mLを、分娩予定日の2～4週間前に1回注射する。</p>	<p>1. 豚への注射における効能又は効果</p> <p>豚への注射後の能動免疫による豚サーコーウイルス2型に伴う死亡率の改善、発育不良豚発生率の低減、増体率低下の改善、リンパ組織病変の軽減、臨床症状の改善、ウイルス血症及びウイルス排泄の低減</p> <p>2. 繁殖雌豚への注射における効能又は効果</p> <p>繁殖雌豚への注射後の能動免疫によるPCV2感染による産子数や離乳頭数の減少、子豚の軽減、ならびに子豚における受動免疫によるPCV2感染に伴うリンパ組織における病変の軽減、PCV2に起因する斃死率及び臨床症状(斃死、発育不良及びリンパ節の腫脹)の軽減</p>	<p>0.5mL 3週齢以上</p> <p>1 初回免疫</p> <p>母豚 2mL 候補豚 2mL 3～4週間前 分娩予定日</p> <p>産歴のある妊娠豚 2mL 3～4週間前 分娩予定日</p> <p>2 次回以降の免疫 (初回免疫豚と次回妊娠時以降の免疫)</p> <p>2mL 2～4週間前 分娩予定日</p>	<p>・本剤は対象豚によって注量異なる(0.5mL又は2mL)ので注意すること。</p> <p>・本剤を繁殖雌豚に注射して子豚の受動免疫を期待する場合(2mL/頭)は、子豚が免疫母豚の乳汁を飲むことにより、予防効果が発揮される。免疫母豚が十分な乳汁を分泌していることを確認するとともに、子豚が乳汁(初乳)を十分に飲むようにすること。それが不十分と考えられる場合には豚への能動免疫(0.5mL/頭)を実施すること。</p> <p>・注射部位を厳守すること。</p>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
10	豚伝染性胃腸炎 生ウイルス乾燥 予防液	KMB	豚伝染性胃腸炎ウ イルス (生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mL を妊娠豚の 皮下に約3週間間 隔で2回注射す る。第2回目注射 は、分娩予定日の 約2週間前とす る。	豚伝染性胃腸炎の 予防	妊娠豚 2mL ————— 2mL 約3週間間隔 約2週間前 分娩予定日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・15日齢未満の子豚がいる豚舎 (分娩舎) では使用しないこと。</li> <li>・本剤は豚舎内に飛散させないよう注意し、もし飛散した場合、直ちに消毒すること。</li> <li>・本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の乳汁を常に飲むことによって予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の乳汁を分泌しているかどうか、また乳汁を飲んでいない子豚がいなかどうか確認すること。</li> </ul>	
11	豚パルボ生ワク チン「KMB」	KMB	豚パルボウイルス (生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 1 mL を豚の皮下 に注射する。	豚パルボウイルス 感染症の予防	1mL —————		
12	豚パルボワクチ ン「KMB」 “京都微研” 豚パルボワクチ ン・K	KMB 京都微研	豚パルボウイルス (不活化)	繁殖豚に2 mL を、 1～4週間隔で2 回、皮下に注射す る。	豚パルボウイルス による死産の予防	2mL ————— 2mL 1～4週間隔		

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
13	フォステラ PRRS	ゾエテイイス	豚繁殖・呼吸障害 症候群 ウイルス (生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mL を 1 日 齢 以 上の豚の筋肉内に 注射する。	豚繁殖・呼吸障害 症候群 ウイルス感 染による呼吸器症 状の軽減、肺病変 の軽減及びウイル ス血症の予防	<p>2mL ├───┬───┘ 1日齢以上</p> <p>本剤を 1 日 齢 の子豚に注射した結果、投与後 26 週まで免疫が持続することが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・繁殖用雌豚には注射しないこと。</li> <li>・本剤を幼若な豚に注射する場合、母子免疫の影響を受けてワクチン効果が増進される可能性がある。</li> <li>・野外ウイルスが体内で増殖している豚にワクチン注射をした場合、ワクチン株と野外ウイルスの組換えが起る可能性がある。</li> <li>・対象となる健康な子豚全頭に一斉に注射すること。</li> <li>・ P R R S 陰性農場では使用しないこと。</li> <li>・ P R R S 汚染農場に P R R S 陰性豚を導入する際にワクチンを注射する場、ワクチンを減少させる機会を減少させた豚を注射後 6 週間は繁殖用豚から隔離して飼育すること。</li> <li>・ワクチンウイルスは注射豚から排泄され、妊娠中の雌豚及び繁殖用種雄豚へワクチンウイルスの飼育管理には注意すること。</li> </ul>	
	インゲルバック PRRS生ワク チン	ペーリンガー		乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mL を 3 ～ 18 週 齢の豚の筋肉内に 注射する。繁殖用 雌豚に対してはそ の 2 mL を交配 3 ～ 4 週間前に筋肉 内に注射する。	豚繁殖・呼吸障害 症候群 ウイルス感 染による子豚の生 産阻害の軽減及び 繁殖用雌豚の繁殖 成績の改善	<p>2mL ├───┬───┘ 3～18週齢</p> <p>繁殖用 雌豚</p> <p>2mL ├───┬───┘ 3～4週間前</p> <p>交配</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妊娠中の繁殖用雌豚及び繁殖用雄豚には注射しないこと。</li> <li>・本剤を幼若な豚に注射する場合、母子免疫の影響を受けてワクチン効果が増進される可能性がある。</li> <li>・野外ウイルスが体内で増殖している豚にワクチン注射をした場合、ワクチン株と野外ウイルスの組換えが起る可能性がある。</li> <li>・対象となる健康な子豚全頭に一斉に注射すること。</li> <li>・ P R R S 陰性農場では使用しないこと。</li> <li>・ P R R S 汚染農場に P R R S 陰性豚を導入する際にワクチンを注射する場、ワクチンを減少させる機会を減少させた豚を注射後 6 週間は繁殖用豚から隔離して飼育すること。</li> <li>・ワクチンウイルスは注射豚から排泄され、妊娠中の雌豚及び繁殖用種雄豚へワクチンウイルスの飼育管理には注意すること。</li> </ul>	

一連 番号	14	製品名	日生研 ワクチン	製造販売業者名 (略称)	日生研	有効成分名	豚流行性下痢ウィ ルス (生)	用法・用量	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mLずつを、2～ 8 週間の間隔で妊 豚の筋肉内に2回 回注射する。2回 目の注射は分娩予 定の約2週間前と する。	効能・効果	母豚を免疫し、そ の乳汁を哺乳させ ることによる子豚 の豚流行性下痢発 症の阻止又は軽減	接種プログラム	妊娠豚 2mL 2～8週間隔 約2週間前 2mL 分娩予定日	使用上の注意 (抜粋)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本剤の注射時には、生後7日齢未満の幼若豚は、注射対象豚から隔離すること。</li> <li>・ 本剤は妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の初乳及び母乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の乳を分泌しているかどうか、また、子豚が乳を十分に飲んでいるかどうかなを確認すること。</li> </ul>	参考情報
----------	----	-----	-------------	-----------------	-----	-------	--------------------	-------	--	-------	--	---------	---	-------------	---	------

(2) 2成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
15	“京都微研, 豚インフルエンザワクチン	京都微研	豚インフルエンザウイルスA型(アジュバント)	豚の頸部皮下または筋肉内に2mLずつを3週間隔で2回注射する。	豚インフルエンザの予防			
16	日本脳炎・豚パ ルボ混合生ワク チン「KMB」  “京都微研, 日本脳炎・豚パ ルボ混合生ワク チン	KMB  京都微研	日本脳炎ウイルス m株・豚パルボウ イルス(いずれも 生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 1mLを豚の皮下 に注射する。	豚の日本脳炎及び 豚パルボウイルス 感染症の予防。特 に繁殖用母豚につ いては、日本脳炎 ウイルス及び豚パ ルボウイルス感染 による死産予防。		<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤に含まれる日本脳炎ウイルスは人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。</li> </ul>	


一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
17	スィムジエン TGE / PED	KMB	豚伝染性胃腸炎ウイルス・豚流行性下痢ウイルス (いずれも生)	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、その2 mL を妊娠豚の筋肉内に約3週間隔で2回注射する。第2回目注射は、分娩予定日の約2週間前とする。	乳汁免疫による子豚の豚伝染性胃腸炎の予防及び豚流行性下痢の発症軽減	妊娠豚 2mL — 3週間隔 約2週間前 分娩予定日 2mL — 2週間前 分娩予定日	<ul style="list-style-type: none"> <li>15日齢未満の子豚がいる豚舎 (分娩舎) では使用しないこと。</li> <li>本剤は豚舎内に飛散させないよう注意し、もし飛散した場合は、直ちに消毒すること。</li> <li>本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の乳汁を常飲することによって予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の乳汁を分泌しているかどうか、また乳汁を飲んでいない子豚がいまいかどうか確認すること。</li> </ul>	
	日生研TGE・PED混合生ワクチン	日生研		乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、その2 mL を4ないし8週間の間隔で妊娠豚の筋肉内に2回注射する。第2回目注射は、分娩予定日の約2週間前とする。	乳汁免疫による子豚の豚伝染性胃腸炎の軽減及び豚流行性下痢の発症の阻止若しくは軽減	妊娠豚 2mL — 4~8週間隔 約2週間前 分娩予定日	<ul style="list-style-type: none"> <li>種付3～4週間後に再発情のないことを確認し、第1回目の注射をすること。</li> <li>本剤の注射時には、生後7日齢未満の幼若豚は、注射対象豚から隔離すること。</li> <li>本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の初乳及び常乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の乳汁を分泌しているかどうか、また乳汁を飲んでいない子豚がいまいかどうか確認すること。</li> </ul>	

(3) 3成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
18	“京都微研, 豚死産3種混合 生ワクチン	京都微研	日本脳炎ウイルス m株・豚パルボウ イルス・豚ゲタウ イルス (いずれも 生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 1mlを種付け前 の繁殖用雌豚の皮 下に注射する。	豚の日本脳炎、豚 パルボウイルス、豚 ゲタウイルス、豚パ ルボウイルス、豚パ ルボウイルス及びゲ タウイルス感染に よる異常産予防	1ml ├── 種付け (交配)	・本剤に含まれる日本脳 炎ウイルスは人獣共通感染 症の病原体であるので、使 用時には十分注意するこ と。	

## 2-2 細菌等ワクチン

(1) 1 成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
1	豚丹毒生ワクチン「科飼研」 日生研豚丹毒生ワクチンC 豚丹毒生ワクチン-KB 豚丹毒生ワクチン「KMB」	科飼研 日生研 京都微研 松研 (販売はKM B)	豚丹毒菌 (生)	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、1 mL を豚の皮下に注射する。	豚丹毒の予防	 <p>参考：標準的には以下の方法が推奨されます。 1 子豚では母豚からの移行抗体を考慮して1～2か月齢時に初回注射し、善感反応がみられない場合には3か月齢時に再注射する。 2 繁殖産補豚及びび繁殖豚では、6か月間隔で補強注射する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 本剤のワクチン株は薬剤の影響を受けやすいので、本剤注射前3日間から注射後7日間ほやうなワクチン株に影響を及ぼすような薬剤の投与又は飼料への添加は避けること。</li> <li>• 本剤に含有される豚丹毒菌は人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。</li> <li>• 豚丹毒菌は、人に対して創傷部を中心とした紅斑、腫脹、リンパ節炎、敗血症、心内膜炎等の症状を示すことがある。</li> <li>• 本剤注射後2～3日頃から注射部位局所にワクチン株による発赤、丘疹(善感反応)が出現するが、この反応は1週間前後で消失する。</li> <li>• SPF豚等、特に感受性の高い豚では善感反応の観察される時期に、注射部位局所以外の体表に、発赤や丘疹が出現する場合がありますので、不活化ワクチンの使用を考慮すること。この発赤や丘疹が重度で、元氣・食欲の不振、発熱がみられた場合は、適切な処置を行うこと。(参考：ワクチン株は特にベニシリン系の薬剤に感受性が高いので、体重1kg当たり約50,000単位の持続性ベニシリンを3日間注射することが一般に有効とされている。)</li> <li>• 生ワクチン使用農場は非使用農場よりも有意に豚丹毒による廃棄率が低いものの、慢性型豚丹毒症例の一部において、生ワクチン株と区別できない株が分離されるとの報告があることから、使用の際にはリスクを理解の上、必要に応じて不活化ワクチンの使用を考慮すること。</li> </ul>	



一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
2	日生研豚丹毒不活化ワクチン	日生研	豚丹毒菌 (血清型2) (不活化) (アジュバント)	5 週齢以上の豚に 1 mL ずつ 3 ~ 5 週間隔で 2 回、筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防	<p>約2.5か月齢の豚にワクチンを3週間隔で2回注射し、強毒株を用いて実験感染試験を行ったところ、1回目注射後、少なくとも5か月間は免疫効果が持続することが確認されている。また、移行抗体保有豚にワクチンを3週間隔で2回注射し、実験感染試験を行ったところ、感染防御効果が認められている。</p>		
3	スラインテクト SER-MIE	日生研	豚丹毒菌 (血清型2) (不活化) (アジュバント)	3 週齢以上の豚に 1 回 0.5mL ずつ 3 ~ 5 週間隔で 2 回、筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防	<p>約1か月齢の豚にワクチンを3週間隔で2回注射し、強毒株を用いた実験感染試験を行ったところ、2回目注射後、少なくとも18週間は免疫効果が持続することが確認されている。</p>		
4	ポーシリス ER Y	松研 (販売は MSDAH)	豚丹毒菌 (血清型2) 菌体抗原 (不活化) (アジュバント)	ワクチンの 2 mL を 4 週齢以上の豚に、4 週間隔で 2 回、頸部筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防	<p>4 週齢と 8 週齢で 2 回注射を行い、血清型 1 型菌 (藤沢株) に対して 26 週齢時まで効果を示すことが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
5	スワイバック ERA	共立	豚丹毒菌表層防御抗原蛋白 (組換え型) (アジュバント)	5 週齢以上の豚に 1 mL ずつ 2 ~ 4 週間隔で 2 回頸部筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防	<p>本剤を 8 週齢の豚に 2 週間隔で 2 回頸部筋肉内に注射したところ、2 回注射後 2 週に GA 平均抗体価及び ELISA 平均抗体価がピークを示し、初回注射時から少なくとも 24 週間の免疫持続が確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
6	ポーシリス TREPSUIS S	松研 (販売は MSDAH)	ストレプトコッカス・スuis (2 型菌) (不活化) (アジュバント)	ワクチンの 2 mL を 2 週齢以上の豚に、3 週間隔で 2 回、頸部筋肉内に注射する。	ストレプトコッカス・スuis 血清型 2 型菌の感染による豚のレンサ球菌症の発症の軽減	<p>2 週齢と 5 週齢にワクチン注射後、8 日目に攻撃試験を行い、更に 20 日間観察した結果、対照群では 5 頭中 3 頭死亡したが、試験群では死亡例がなく、ワクチンの効果が確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
7	破傷風トキシソイド「日生研」	日生研	破傷風トキシソイド (アジュバント)	豚の頸部皮下に2 mLを通常約2週間の間隔で2回注射する。	破傷風の予防	2 mL 約2週間隔		
8	マイコバスター	科飼研	マイコプラズマ・ハイオニューモニエ (不活化) (アジュバント)	生後1週齢から8週齢の子豚に1頭当たり2 mL、さらに2週間後から4週間後に2 mLを筋肉内に注射する。	豚マイコプラズマ肺炎による肺病変形成抑制及び増体量・飼料効率低下の軽減	2 mL 1~8週齢 2~4週間隔	免疫は約1年間持続することが確認されている。  4週齢の際に2週間隔で2回注射後、少なくとも半年間は免疫効果が持続することが確認されている。	
	日生研MPS不活化ワクチン	日生研		3週齢以上の豚に1 mLずつ3~5週間隔で2回、筋肉内に注射する。	豚のマイコプラズマ肺炎による肺病変形成の抑制ならびに増体重抑制及び飼料効率低下の軽減	1 mL 3週齢以上 3~5週間隔	マイコプラズマ肺炎陰性の21日齢ないし38~49日齢の豚にワクチンを3あるいは5週間隔で2回筋肉内に注射し、マイコプラズマ・ハイオニューモニエ (Mhp) 病原性株による実験感染試験を行ったところ、肺病変形成の抑制効果が認められている。また、31日齢の豚を用いた試験では、ワクチン2回注射後44日目あるいは92日目に行つた実験感染試験においても同様の抑制効果が認められ、ワクチンの効果は2回注射後少なくとも92日間持続することが確認されている。	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
9	レスピフェンド MH	ゾエテイス (販売はKM B)	マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (不活化) (ア ジュババント)	生後1～4週齢の 子豚に本品2mL を2週間隔で2 回、頸部筋肉内に 注射する。	豚マイコプラズマ 性肺炎による肺病 変形成及び増体重 抑制の軽減	<p>1週齢の際に用法及び用量どおりに注射したところ、免疫は2回目注射1週間後には成立し、防御効果は少なくとも4か月齢まで持続することが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤は、繁殖母豚又は6週齢以上の豚には注射しないこと。</li> <li>本剤と他のワクチンとの同時投与は避けること。また、本剤注射前に他のワクチンを投与している場合には生ワクチンにあつては4週間以上、不活化ワクチンでは1週間以上の間隔をあけること。</li> <li>注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
	インゲルバック マイコフレック ス	ペーリー ンガ ー		3週齢以上の子豚 に1mLを頸部筋 肉内に1回注射す る。	豚マイコプラズマ 性肺炎による肺病 変形成抑制及び増 体重低下の軽減	<p>少なくとも26週間効果が持続することが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤は、繁殖母豚には注射しないこと。</li> <li>アナフィラキシー反応が起こつた場合は、エピネフリン投与が推奨される。</li> <li>注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
10	レスピシユア	ゾエテイス	マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (不活化) (ア ジュババント)	生後1週齢から8 週齢の子豚に2 mL、さらに2週間 後に2mLを頸部 筋肉内に注射す る。	豚のマイコプラズ マ性肺炎による増 体重抑制及び飼料 効率低下の軽減		<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3週間以内は他のワクチン注射をしないことが望ましい。</li> <li>注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
	レスピシユア ワン	ゾエテイス		生後1日齢 (出生 翌日)～10週齢の 子豚の頸部筋肉内 に2mLを注射す る。	豚のマイコプラズ マ性肺炎による肺 病変形成の抑制な らびに増体重抑制 及び飼料効率低下 の軽減		<ul style="list-style-type: none"> <li>注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
11	エムパック	MSDAH	マイコプラズマ・ハイオニューモニエ (不活化) (アジュバント)	1 週齢以上の子豚に 1 mL を 2 週間隔で 2 回、頸部筋肉内に注射する。 又は、3 週齢以上の子豚に 2 mL を 1 回、頸部筋肉内に注射する。	豚のマイコプラズマ性肺炎による肺病変形成の抑制ならびに増体量抑制及び飼料効率低下の軽減	<p>1 mL 1 週齢以上</p> <p>2 週間隔</p> <p>1 mL</p> <p>又は</p> <p>2 mL 3 週齢以上</p> <p>3 週齢の際に注射した場合、27 週齢まで免疫が持続することが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワクチンの注射回数、農場の汚染状況によって選択すること。農場での汚染が少ないと想定される場合に限り 1 回注射のスケジュールを選択すること。</li> <li>・移行抗体価の高い個体に 1 回注射をおこなう場合、血清抗体価の上昇が認められないことがある。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
12	エンテリゾール イリアイテイス FC エンテリゾール イリアイテイス TF	ベリンガー	ローソニア トラセルラリス (生)	乾燥品を添付の溶解用液で1頭当たり2mLになるように溶解したのち、3週齢以上の豚に1回1頭当たり2mLを経口投与する。又は乾燥品を添付の溶解用液で溶解したのち、豚の日齢に応じた適量の飲水に1頭当たり1頭分とし、3週齢以上の豚に1回飲水投与する。飲水投与の場合は4時間で飲みすぎる量の飲水に混合する。	豚のローソニアイントラセルラリス感染症(急性出血性腸炎型を除外)による増体重低下の軽減	経口投与 又は 飲水投与  2mL 3週齢以上  1頭分※ 3週齢以上  ※4時間で飲みすぎる量の飲水に混合する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本剤は、豚以外には投与しないこと。</li> <li>・本剤は弱毒生菌ワクチン株であり、投与された豚から排泄される可能性がある。同居感染試験では本ワクチン株の同居感染は認められていないが、ワクチンを投与していない豚と同居させない等の飼養管理上の適切な対応を行うこと。</li> <li>・飲水投与の場合、チオ硫酸ナトリウム(ハイポ) (0.055%)又は脱脂粉乳(スキムミルク) (0.25%)を添加することにより、残留塩素を除去した後に、添付の溶解用液で溶解したワクチンを混合すること。</li> <li>・飲水投与の場合は、日齢に応じ4時間で飲みすぎる量の飲水にワクチンを混合すること。</li> <li>・飲水量は日齢、季節などにより異なるために、ワクチン投与前に4時間で飲みすぎる飲水量を確認すること。</li> <li>・飲水投与の場合、豚に均等に投与するため、全部の豚が均等に飲めるように十分な飲水器を用意すること。</li> <li>・本剤のワクチン株は薬剤の影響を受けやすいので、本剤投与前3日間及び投与後3日間はワクチン株に影響を及ぼすような薬剤の注射、経口投与又は飼料中への添加は避けること。</li> <li>・使用禁止期間(休薬期間)の長い注射薬剤で治療した豚へのワクチンの投与には、ワクチン投与前に、注射した薬剤に応じた適切な期間をあけること。</li> <li>・妊娠豚への安全性は確認されていない。</li> </ul>	

(2) 2成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
13	グレースーバスター 日生研グレースーバスター 一病2価ワクチン	科飼研 日生研	ヘモフィルス・パラスイス(血清型2)、ヘモフィルス・パラスイス(血清型5)(いずれも不活化)(アジュバント)	30日齢以上の豚に2～4週の間隔で1回1mLずつを2回、筋肉内に注射する。	ヘモフィルス・パラスイス血清型2菌及び5菌の感染によるグレースーバ病の予防	1mL 30日齢以上 2～4週間隔 1mL 30日齢以上		
14	日生研AR混合ワクチンBP	日生研	ボルデテラ・プロンキセプチカ(I相菌)(不活化)、パストツレラ・ムルトシダ(莢膜抗原型D)皮膚壊死毒素(アジュバント)	・母豚に用いる場合 1回5mLずつを1～2か月間隔で2回、筋肉内に注射する。ただし、2回目の注射は分娩予定日の約1か月前に行う。次回以降の繁殖時に行う補強注射は、5mLをその分娩予定日の約1か月前に1回、筋肉内に行う。 ・子豚に用いる場合 3週齢以上の子豚に対し、1回1mLずつを3～5週間隔で2回、筋肉内に注射する。	ボルデテラ・プロンキセプチカ及び毒素産生パストツレラ・ムルトシダの混合感染、又はそのいずれかの菌の感染による豚の萎縮性鼻炎の予防	5mL 約2～3か月前 約1か月前 分娩予定日 5mL 約1か月前 分娩予定日 1mL 3～5週間隔 3週齢以上	・種付予定前10日以内のもの、哺乳中のも、種付後20日以内及び分娩前20日以内のものには、注射しないこと。	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
15	日生研ARBP 混合不活化ワク チンME	日生研	ボルデテラ・プロ ンキセプチカ (I 相菌) (不活化)、 パスツレラ・ムル トシダ (莢膜抗原 型D) 皮膚壊死毒 素 (アジュバント)	妊娠豚に対し、1 回 2 mL を 1 〜2 か月の間隔で 2 回、筋肉内に注 射する。ただし、 2 回目の注射は分 娩予定日の 2〜4 週前に行う。次回 以降の繁殖時に行 う補強注射は、2 mL をその分娩予 定日の 2〜4 週間 前に 1 回、筋肉内 に行う。	ボルデテラ・プロ ンキセプチカ及び 毒素産生パスツレ ラ・ムルトシダの 混合感染、又はそ のいずれかの菌の 感染による豚の萎 縮性鼻炎の予防	<p>初回 2mL 1〜2月間隔 2〜4週間前 分娩予定日</p> <p>妊娠豚</p> <p>次回以降 2mL 2〜4週間前 分娩予定日</p> <p>初産豚では1 ないし 2 か月間隔で 2 回注射、2 産目以降では分娩の 2 又は 4 週前に 1 回追加注 射することにより、良好な抗体応答が認められ、 初乳には感染防御に有効な高量の移行抗体が確 認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>種付予定前10日以内のもの、哺乳中のもの、種付後 20日以内及び分娩前1週以 内のものには、注射しない こと。</li> <li>本剤は、母豚に注射し、 その子豚が免疫母豚の初乳 を飲むことで予防効果が発 揮される。免疫母豚が十分 量の初乳を分泌しているか どうか、また初乳を飲んで いない子豚がいないかどう かも確認すること。</li> </ul>	
16	スライムジエン r ART 2	KMB	ボルデテラ・プロ ンキセプチカ皮膚 壊死毒素 (組換え 型)、パスツレラ・ ムルトシダ皮膚壊 死毒素 (組換え型) (アジュバント)	妊娠豚に対し、2 mL 分娩前 5〜6 週及び 2 週間後の 2 回筋肉内に注射 する。次回の分娩 からは、2 mL を分 娩前 2 週間後の 1 回、筋肉内に注射 する。子豚 (1 か 月齢以上) には、 1 mL を 2 回、3 〜4 週間隔で筋肉 内に注射する。	ボルデテラ・プロ ンキセプチカ及び 毒素産生パスツレ ラ・ムルトシダの 混合感染、又はそ のいずれかの菌の 感染による豚の萎 縮性鼻炎の予防	<p>初回 2mL 5〜6週間前 2週間前 分娩予定日</p> <p>妊娠豚</p> <p>次回以降 2mL 2週間前 分娩予定日</p> <p>本剤を母豚に注射した場合、子豚の移行抗体価 はボルデテラ・プロンキセプチカ、パスツレラ・ ムルトシダがいずれも 3 か月齢前後まで持続す ることが確認されている。</p> <p>1mL 1mL 3〜4週間隔 1か月齢以上</p> <p>本剤を 5〜6 週齢の抗体陰性豚に 4 週間隔で 2 回注射したとき、2 回目注射後 4 週目には最小有 効抗体価に達し、少なくとも 17 週目まで持続す ることが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>母子免疫の目的で本剤を 母豚に使用する際は、子豚 が免疫母豚の初乳を飲むこ とで予防効果が十分量の初 乳を分泌しているかどうか、 また、初乳を飲んでい ない子豚がいないかどうか 確認すること。</li> </ul>	

(3) 3成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
17	アラデイクエータ	ゾエティイス	ボルデテラ・ブロンキセプチカ (I相菌) (不活化)、パスツレラ・ムルトシダ (莖膜抗原型D) (不活化)、パスツレラ・ムルトシダ (莖膜抗原型D)壊死毒素(アジュバント)	妊娠豚に対し、1回2mLずつを分娩予定日の6及び2週間前の2回、頸部筋肉内に注射する。次回以降の繁殖時に行う補強注射は、2mLをその分娩予定日の2週間前に1回、頸部筋肉内に行う。	ボルデテラ・ブロンキセプチカ及び毒素産生パスツレラ・ムルトシダ(A及びD型)の感染による産子における豚萎縮性鼻炎の予防	<p>初回 2mL 6週間前 妊娠豚 2mL 2週間前 次回以降 2mL 2週間前</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3週間以内は他のワクチンを注射しないことが望ましい。</li> <li>本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の初乳を分泌しているかどうか、また初乳を飲んでいない子豚がいないかどうか確認すること。</li> <li>注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
18	日生研 A R B P・豚丹毒混合不活化ワクチン	日生研	ボルデテラ・ブロンキセプチカ (I相菌) (不活化)、パスツレラ・ムルトシダ (莖膜抗原型D) 皮膚壊死毒素、豚丹毒菌 (血清型2) (不活化) (アジュバント)	<ul style="list-style-type: none"> <li>妊娠豚に用いる場合 1回5mLずつを1～2か月の間隔で2回、筋肉内に注射する。ただし、2回目の注射は分娩予定日の約1か月前に行う。</li> <li>子豚に用いる場合 5週齢以上の子豚に1回1mLずつを3～5週間隔で2回、筋肉内に注射する。</li> </ul>	ボルデテラ・ブロンキセプチカ並びに毒素産生パスツレラ・ムルトシダの感染による豚の萎縮性鼻炎 (A R) 及び豚丹毒の予防	<p>妊娠豚 5mL 約2～3か月前 約1か月前 分娩予定日 1mL 5週齢以上 3～5週間隔</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>種付予定前10日以内のもの、哺乳中のもので、種付後20日以内及び分娩前20日以内のものには、注射しないこと。</li> </ul>	<p>5週齢の際に用法及び用量どおりにワクチンを注射したところ、ボルデテラ・ブロンキセプチカ (Bb) 凝集抗体及びパスツレラ・ムルトシダ・トキソイド (Pm-T) ELISA 抗体の良好な抗体上昇が認められている。また、豚丹毒菌を実験的に感染させたところ、発症防御効果が認められた。ワクチン注射後、Bb に対し有効な免疫は18週、Pm-T に対し有効な免疫は10週、豚丹毒菌に有効な免疫は19週まで持続することが確認されている。</p>



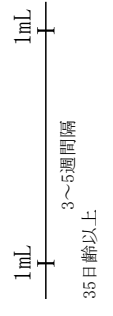
一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
19	スワイバック コロンポBPE	共立	ボルデテラ・ブロンキセプチカ赤血球凝集素、パストレラ・ムルトシダ皮膚壊死毒素、豚丹毒菌表層防御蛋白(組換え型)(アジュバント)	妊娠豚に対し、1週間に1回1mLずつを4週間で2回注射する。ただし、2回目注射は分娩予定日の約1か月前までに注射し、前回注射部位の反対側に注射する。次回以降の繁殖時に行う追加注射は、1mLをその分娩予定日の1か月前までに1回注射する。	ボルデテラ・ブロンキセプチカ及びパストレラ・ムルトシダ感染による豚の萎縮性鼻炎の予防並びに豚丹毒の予防	<p>初回 1mL 約2か月前</p> <p>妊娠豚</p> <p>次回以降 1mL 約1か月前</p> <p>分娩予定日</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 交配後間がないもの及び分娩前30日以内の妊娠豚には注射しないこと。</li> <li>・ 本剤は、母豚に注射し、その子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分な初乳を分泌しているか、また、子豚が初乳を確実に摂取しているかを確認すること。</li> <li>・ 注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
20	スィムジエン ART2/ER	KMB	ボルデテラ・ブロンキセプテラ・破壊死毒素 (組換え型)、パスツレラ・ムルトシダダ皮膚壊死毒素 (組換え型)、豚丹毒菌表面防御抗原 (組換え型) (アジュバント)	妊娠豚に対し、2 mL 分娩前 5 ～ 6 週及び 2 週間後の 2 回筋肉内に注射する。次回の分娩からは 2 mL を分娩前 2 週間後の 1 回、筋肉内に注射する。子豚 (1 か月齢以上) には、1 mL を 2 回、3 ～ 4 週間隔で筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防並びにボルデテラ・ブロンキセプテラ及び毒素産生パスツレラ・ムルトシダダの混合感染又はそのいずれかの菌の感染による豚の萎縮性鼻炎の予防	<p>初回 2mL 5～6週間前 2週間前 分娩予定日</p> <p>妊娠豚</p> <p>次回以降 2mL 2週間前 分娩予定日</p> <p>本剤を母豚に注射した場合、子豚の移行抗体価はボルデテラ・ブロンキセプテラ、パスツレラ・ムルトシダダいずれも 3 か月齢前後まで持続することが確認されている。</p> <p>1mL 3～4週間隔 1か月齢以上</p> <p>本剤を 5 ～ 6 週齢の抗体陰性豚に 4 週間隔で 2 回注射したとき、2 回目注射後 4 週目には最小有効抗体価に達し、少なくとも 16 週目まで持続することが確認されている。</p>	<p>・母子免疫の目的で本剤を母豚に使用する際は、子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の初乳を分泌しているかどうか、また、初乳を飲んでいない子豚がいないかどうかを確認すること。</p>	
21	マイコバスター ARプラス	科飼研	ボルデテラ・ブロンキセプテラ破砕上清 (皮膚壊死毒素)、パスツレラ・ムルトシダダトキソイド、マイコプラズマ・ハイオニエーモニエ (不活化) (アジュバント)	生後 1 週齢から 4 週齢の子豚に 1 頭当たり 1 mL、さらには 2 週間後から 4 週間後に 1 mL を筋肉内に注射する。	豚の萎縮性鼻炎の予防及び豚マイコプラズマ肺炎による肺病変形成抑制及び増低下の軽減	<p>1mL 1～4週齢 2～4週間隔</p> <p>4 週齢の豚に 2 週間隔で 2 回注射後、ボルデテラ・ブロンキセプテラに対しては少なくとも 18 週齢まで、パスツレラ・ムルトシダダとマイコプラズマ・ハイオニエーモニエに対しては少なくとも 25 週齢まで、免疫効果が持続することが確認されている。</p>		

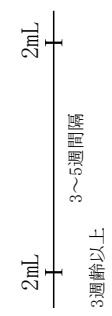
(4) 4成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
22	ポシーリス A PP-N	松研 (販売はMSDAH)	アクチノバシラ ス・プルロニエ モニエA p x I ト キソイド、アクチ ノバシラス・プル ロニエーモニエA p x II トキソイ ド、アクチノバシ ラス・プルロニエ ーモニエA p x III トキソイド、アク チノバシラス・プ ルロニエーモニエ 菌体外膜蛋白 (O MP) (アジュバ ント)	ワクチンの2mL を6週齢以上の豚 に4週間隔で2 回、頸部筋肉内に 注射する。	豚のアクチノバシ ラス・プルロニエ ーモニエ血清型 1、2、5、7、 10型菌感染症 (胸 膜肺炎) の発症防 御		<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
23	“京都微研”ピ ッグウイン- E A	京都微研	豚丹毒菌抽出抗 原、アクチノバシ ラス・プルロニエ ーモニエ (血清型 1)、アクチノバ シラス・プルロニ エーモニエ (血清 型2)、アクチノ バシラス・プルロ ニエーモニエ (血 清型5a) (いず れも不活化) (ア ジュバント)	約30～50日齢豚の 耳根部後方頸部筋 肉内に1mL注射 する。その後90日 齢までに約30～60 日間隔で反対側の 耳根部後方頸部筋 肉内に1mL注射 する。	豚丹毒及び豚のア クチノバシラス・ プルロニエーモニ エ血清型1、2、 5型菌感染症の予 防		<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	<p>本剤の対象病原体に対する抗体陰性の約30日齢の豚10頭に、本剤を1か月間隔で2回、耳根部後方頸部筋肉内に注射し、第2回注射後4か月目に豚丹毒菌藤沢株、アクチノバシラス・プルロニエーモニエ (APP) Y-1株 (血清型1型)、APP G-4株 (血清型2型) 及びAPP E-3株 (血清型5a型) による攻撃試験を実施した。攻撃時の各病原体に対する抗体価は、いずれも有効抗体価以上を維持しており、また、攻撃試験終了後の各臓器より攻撃菌が分離されなかったことから、第2回注射後4か月間は本剤の有効性が持続することが確認されている。</p>

(5) 6成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
24	日生研豚A P ワ クチン1 2 5 R X	日生研	アクチノバシラ ス・プルロニエ モニエ (血清型 1)、アクチノバ シラス・プルロ ニエモニエ (血 清型 2)、アクチ ノバシラス・プ ルロニエ (血 清型 5) (いずれ も不活化)、アク チノバシラス・プ ルロニエモニエ r A p x I タンパ ク、アクチノバシ ラス・プルロニエ II タンパク、アク チノバシラス・プ ルロニエモニエ r A p x III タンパ ク (いずれも組換 え型) (アジューバ ント)	35日齢以上の豚に 3～5週間隔で1 回 1 mLずつを 2 回、頸部筋肉内に 注射する。	豚のアクチノバシ ラス・プルロニエ モニエ血清型 1、2及び5菌感 染症の予防	 <p>35日齢以上 3～5週間隔</p> <p>35日齢の豚に3週間隔で2回ワクチンを注射し、 2週後にアクチノバシラス・プルロニエモニ エ (App) 1型菌、2型菌及び5型菌の病原性株 を用いて実験感染試験を行ったところ、肺病変 スコアの低減効果が認められている。また、40 日齢の豚に4週間隔で2回ワクチンを注射し、 8週後に同様に実験感染試験を行った場合にも 同様の肺病変抑制効果が認められ、免疫効果の 持続が確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
25	スワインテクト APX-ME	日生研	アクチノバシラス・プルロニエモニエ (血清型 1)、アクチノバシラス・プルロニエモニエ (血清型 2)、アクチノバシラス・プルロニエモニエ (血清型 5) (いずれも不活化)、アクチノバシラス・プルロニエモニエ r A p x I タンパク、アクチノバシラス・プルロニエモニエ II タンパク、アクチノバシラス・プルロニエモニエ r A p x III タンパク (いずれも組換え型) (アジュバント)	3 週齢以上の豚に 3 回 1 mL ずつを 2 回、頸部筋肉内に注射する。	豚のアクチノバシラス・プルロニエモニエ 1、2 及び 5 菌感染症の予防	<p>5~6週齢の豚にワクチンを3週間隔で2回筋肉内注射し、アクチノバシラス・プルロニエモニエ (App) 各型菌を用いて実験感染試験を行ったところ、いずれの菌に対しても防御効果を示した。この効果はワクチンを5週間隔で2回筋肉内注射した場合にも同様に認められている。また、実験感染試験により、ワクチンによる免疫効果は2回注射後少なくとも12週間持続することが確認されている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	
26	リターガード T-C	ゾエテイス	大腸菌 K88線毛抗原、大腸菌 987P線毛抗原、大腸菌 F41線毛抗原、大腸菌 B (不活化)、クロストリジウム・パーフリンゲンシス C型β毒素トキソイド (アジュバント)	妊娠豚の頸部筋肉内に 2 mL 注射する。分娩の約 6 週間前に初回注射を行い、3 週間後に 2 回目の注射を行う。次回の妊娠からは分娩の約 3 週間前に 1 回注射を行う。	哺乳豚の K88、K99、987P、F41線毛抗原及び易熱性エンテロトキシン産生大腸菌による下痢並びにクロストリジウム・パーフリンゲンシス C 型菌による壊死性腸炎の予防	<p>初回 2mL 約6週間前 分娩予定日 妊娠豚 次回以降 2mL 約3週間前 分娩予定日</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3週間以内は他のワクチンを注射しないことが望ましい。</li> <li>•本剤は、妊娠豚に注射し、哺乳豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮されるため、免疫母豚が十分量の初乳を分泌しているか、また、初乳を飲んでいない哺乳豚がいまいか確認すること。</li> <li>•注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
27	日生研豚A P M 不活化ワクチン	日生研	アクチノバシラ ス・プルロニエ モニエ (血清型 1)、アクチノバ シラス・プルロ ニエ (血清型 2)、アクチノ バシラス・プル ロニエ (血 清型 5) (いずれ も不活化)、ア クチノバシラ ス・プルロニ エ (血清型 1) 、アクチノバ シラス・プル ロニエ (血清 型 2)、アクチ ノバシラス・ プルロニエ (血 清型 5) (い ずれも不活 化)、アクチ ノバシラス・ プルロニエ (血 清型 6) (い ずれも不活 化) (アジュ バント)	3 週齢以上の豚に 3 ～ 5 週間隔で 1 回 2 mL ずつを 2 回、筋肉内に注射 する。	豚のアクチノバシ ラス・プルロニエ モニエ血清型 1、2 及び 5 菌感 染症の予防ならび に豚のマイコプラ ズマ肺炎による肺 病変形成の抑制な らびに増体重抑制 及び飼料効率低下 の軽減	 <p>アクチノバシラス・プルロニエモニエ (App) 陰性豚の 3 週齢の豚に 3 週間隔で 2 回 ワクチンを注射し、2 回注射後 2 週に App2 型菌の病原性株を用いて実験感染試験を行ったところ、肺病変スコアの低減効果が認められている。また、マイコプラズマ・ハイオニエモニエ (Mhp) 陰性の豚に 3 週間隔で 2 回 ワクチンを注射し、2 回注射後 2 週に Mhp 病原性株による実験感染試験を行ったところ、肺病変形成の抑制効果が認められている。App 及び Mhp 陰性の豚に 4 週間隔で 2 回 ワクチンを注射し、2 回注射後 8 週に同様な実験感染試験を行った場合にも肺病変抑制効果が認められ、ワクチンの効果は少なくとも 2 回注射後 8 週まで持続することが確認されている。</p>		

## 2-3 ウイルス・細菌の混合ワクチン

(1) 2成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
1	インゲルバック フレックスコン ボ ミックス	ペーリンガー	豚サールウイルス (2型・組換え型)、 マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (いづれも不活 化) (アジュバ ント)	豚サールウイルス 2型不活化抗原及 びマイコプラズマ ハイオニューモニ エ不活化抗原のそ れぞれ全量を混合 したもの、2mL を、3～5週齢の 子豚の頸部筋肉内 に1回注射する。 マイコプラズマ・ハ イオニューモニエ 不活化抗原がヘッ ドスペース容器の 製品では、添付の 連結針を用いて、 豚サールウイルス 2型不活化抗原の 全量をマイコプラ ズマ・ハイオニュー モニエ不活化抗 原に注入し、混合 する。 マイコプラズマ・ハ イオニューモニエ 不活化抗原がヘッ ドスペースなし容 器の製品では、滅 菌済の注射器を用 いて豚サールウイ ルス2型不活化抗 原及びマイコプラ ズマ・ハイオニュー モニエ不活化抗原 のそれぞれ全量を 吸引し、両抗原の 総量以上の容量の 滅菌済混合用容器 にそれぞれ全量を 注入し、混合する。	豚サールウイルス 2型感染に起因す る死亡率の改善、 発育不良豚の発生 率の低下、増体量 の低下の改善、臨 床症状の改善及び ウイルス血症発生 率の低下、並びに 豚マイコプラズマ 性肺炎による肺病 変形成抑制と増体 量低下の軽減	2mL ―― ―― 3～5週齢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切に両抗原を混合するため、使用説明書をよく読むこと。</li> <li>・アナフィラキシー反応が起った場合は、エピネフリン投与が推奨される。</li> <li>・本剤は、他のワクチンとの同時投与は避けること。また、本剤注射後3週間以内は他のワクチンを投与しないことが望ましい。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

(2) 3成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
2	フルッシュアER	ゾエティイス	豚インフルエンザウイルスA型(2株)・豚丹毒菌(いずれも不活化)(アジュバント)	乾燥ワクチンを液状ワクチンで完全に溶解し、その2mLを6週齢以上の健康な豚の頸部筋肉内に3週間の間隔で2回注射する。	豚インフルエンザの発症防衛及び豚丹毒の予防。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・本剤は妊娠豚には注射しないこと。</li> <li>・本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3週間以内は他のワクチンを注射しないことが望ましい。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	



一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
3	インゲルバック 3フレックス	ベアリンガー	豚サージコウウイルス (2型・組換え型)、 マイコプラズマ、 ハイオニオニオニ エ(いづれも不活 化)、豚繁殖・呼 吸障害症候群ウイ ルス(生)(アジ ユバント)	豚サージコウウイルス2 型不活化抗原、マイ コプラズマ、ハイオ ニオニオニオニ不活 化抗原及び豚繁殖・呼 吸障害症候群ウイ ルス乾燥抗原のそれ ぞれ全量を混合した ものの2mlを、3～ 5週齢の子豚の頸部 筋肉内に1回注射す る。 マイコプラズマ、ハイ オニオニオニ不活 化抗原がヘッドスベ ース容器の製品で は、添付の連結針を 用いて、豚サージコ ウウイルス2型不活 化抗原の全量をマイ コプラズマ、ハイオ ニオニオニ不活 化抗原に混合した 後、その全量を豚 繁殖・呼吸障害症 候群ウイルス乾燥 抗原に混合する。 マイコプラズマ、 ハイオニオニオニ 不活化抗原がヘッ ドスベースなし容 器の製品の注射器 を用いて豚サージ コウウイルス2型 不活化抗原及び マイコプラズマ、 ハイオニオニオニ 不活化抗原のそれ ぞれ全量を吸引し 、両抗原の総量以 上の容量の滅菌溶 液混合容器にそれ ぞれ全量を注入し 、その後、その全 量を豚繁殖・呼吸 障害症候群ウイ ルス乾燥抗原に混 合する。	豚サージコウウイルス 2型感染に起因す る死亡率の改善、 発育不良豚の発生 率の低下の改善、 臨床症状の改善及 びウイルス血症発 生の低減。豚マイ コプラズマ性肺炎 による肺病変形成 抑制及び増体量低 下の軽減。豚繁殖 ・呼吸障害症候群 ウイルス感染によ る子豚の生産阻 害の軽減。	2mL ├── 3～5週齢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切に抗原を混合するため使用説明書をよく読むこと。</li> <li>・繁殖用雌豚及び繁殖用雄豚には注射しないこと。</li> <li>・PRRS陰性農場では使用しないこと。</li> <li>・注射対象となる健康な子豚全頭に一斉に注射すること。</li> <li>・PRRS汚染農場にPRRS陰性豚を導入する際にワクチンを注射する場合は、PRRSワクチン株が他の豚へ伝播する機会を減少させるために、ワクチンを注射した豚を接種後6週間は隔離して飼育すること。</li> <li>・PRRSワクチンウイルスは注射豚から排泄される水平感染する場がある場合、ワクチンウイルスが伝播しないように注射豚(群)の飼育管理には注意すること。</li> <li>・野外PRRSウイルスが体内で増殖している豚にワクチン注射した場合、PRRSワクチン株と野外ウイルスの組換えが起こる可能性が否定できない。</li> <li>・本剤を幼若な豚に注射する場合、母子免疫の影響を受けてワクチン効果が抑制されることがある。</li> <li>・過敏な体質の豚では、注射後短時間内でアナフィラキシー様反応を呈する場合がある。アナフィラキシー反応が起こった場合は、エピネフリン投与が推奨される。</li> <li>・本剤は、他のワクチンとの同時投与は避けること。また、本剤注射後3週間以内は他のワクチンを投与しないことが望ましい。</li> <li>・注射部位を厳守すること。</li> </ul>	

表 ワクチン一覧におけるワクチンと含有するウイルス・細菌の名称一覧

製品名	ページ	ウイルス名										細菌名									
		日本脳炎ウイルス	豚バルボウイルス	豚ゲタウイルス	オースキー病ウイルス	豚インフルエンザウイルス	豚サーコウイルス2型	豚伝染性胃腸炎ウイルス	豚流行性下痢ウイルス	豚繁殖・呼吸障害候群ウイルス	アクチノバシラス・ブルロニニューモニエ	クロストリジウム・パーフリンゲン	ストレプトコッカス・スイス	大腸菌	豚丹毒菌	破傷風菌	パストレラ・ムルトシダ	ボルデテラ・ブロンキセプチカ	ヘモフィルス・パラシイス	マイコプラズマ・ハイオニューモニエ	ローソニア イントラセラーリス
<b>(2-1 ウイルスワクチン)</b>																					
日生研 日本脳炎生ワクチン	8	○																			
“京都微研.日本脳炎ワクチン	8	○																			
動物用日脳TCワクチン「KMB」	9	○																			
日生研 日本脳炎TC不活化ワクチン	9	○																			
“京都微研.日本脳炎ワクチン・K	9	○																			
スパキシノオーエスキー	10				○																
スパキシノオーエスキー フォルテ ME	11				○																
ボーシリス Begonia DF・10	11				○																
ボーシリス Begonia DF・50	11				○																
フォステラPCV	12					○															
インゲルバック サーコフレックス	12					○															
ボーシリスPCV	12					○															
サーコバック	13					○															
豚伝染性胃腸炎生ウイルス乾燥予防液	14							○													
豚バルボ生ワクチン「KMB」	14		○																		
豚バルボワクチン「KMB」	14		○																		
“京都微研.豚バルボワクチン・K	14		○																		
フォステラPRRS	15									○											
インゲルバック PRRS生ワクチン	15									○											
日生研PED生ワクチン	16								○												
“京都微研.豚インフルエンザワクチン	17					○															
日本脳炎・豚バルボ混合生ワクチン「KMB」	17	○	○																		
“京都微研.日本脳炎・豚バルボ混合生ワクチン	17	○	○																		
スィムジェンTGE/PED	18							○	○												
日生研TGE・PED混合生ワクチン	18							○	○												
“京都微研.豚死産3種混合生ワクチン	19	○	○	○																	
<b>(2-2 細菌等ワクチン)</b>																					
豚丹毒生ワクチン「科飼研」	20													○							
日生研豚丹毒生ワクチンC	20													○							
豚丹毒生ワクチン-KB	20													○							
豚丹毒生ワクチン「KMB」	20													○							
日生研豚丹毒不活化ワクチン	21													○							
スウィンテクトSER-ME	21													○							
ボーシリスERY	21													○							
スワイバックERA	21													○							
ボーシリスSTREPSUIS	21													○							
破傷風トキシノイド「日生研」	22														○						
マイコバスター	22																				○
日生研MPS不活化ワクチン	22																				○
レスピフェンドMH	23																				○
インゲルバック マイコフレックス	23																				○
レスピシューア	23																				○
レスピシューアワン	23																				○
エムバック	24																				○
エンテリゾール イリアイティス FC	25																				○
エンテリゾール イリアイティス TF	25																				○
グレーサーバスター	26																				○
日生研グレーサー病2価ワクチン	26																				○
日生研AR混合ワクチンBP	26																				○
日生研ARBP混合不活化ワクチンME	27																				○
スィムジェンART2	27																				○
アラディケーター	28																				○
日生研ARBP・豚丹毒混合不活化ワクチン	28																				○
スワイバックコンボBPE	29																				○
スィムジェンART2/ER	30																				○
マイコバスター-ARプラス	30																				○
ボーシリスAPP-N	31																				○
“京都微研.ピッグウイン-EA	31																				○
日生研豚APワクチン125RX	32																				○
スウィンテクトAPX-ME	33																				○
リターガードLT-C	33																				○
日生研豚APM不活化ワクチン	34																				○
<b>(2-3 ウイルス・細菌の混合ワクチン)</b>																					
インゲルバック フレックスコンボ ミックス	35					○															○
フルシューアER	36					○															○
インゲルバック 3フレックス	37					○															○



**動物用ワクチン等保管協議会**

**協議会幹事団体：公益社団法人日本動物用医薬品協会**

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-6-10 サトービル6階

TEL 03-5204-0440